―― 巻頭特集 ――

被害者の痛みを心に刻み 戦後補償の実現と非戦の誓いを

―― 岡まさはる記念長崎平和資料館案内 ――

崎山　昇
岡まさはる記念長崎平和資料館事務局長

1．はじめに

岡まさはる記念長崎平和資料館は、1995年10月1日、敗戦後50年の年に設立され、アジア・太平洋戦争で原爆が投下された被爆地ナガサキの西坂の丘に建っている。ルーテル教会牧師で、長崎在日朝鮮人の人権を守る会（以下、「守る会」）代表、長崎市議会議員も3期務めた岡正治氏が、原爆資料館だけでは日本の若者が日本人は被害者だったという間違った歴史認識を持ってしまう、一人ひとりの市民に過去の植民地支配と侵略戦争の加害の事実を知ってもらうための資料館が必要だ、と当館の設立を提唱した。そして、岡氏は、街頭に立ち、募金活動に取り組んでいたが、1994年7月21日急逝した。その後、当館の設立に尽力したのが、岡氏とともに活動し、岡氏亡き後、その遺志を継ぎ「守る会」代表に就いた髙實康稔氏であった。岡氏、髙實氏がいなければ当館の設立はなかった。初代理事長を務めた髙實氏も2017年4月7日に他界し、その後、理事長となった園田尚弘氏を中心とした理事会によって当館は運営している。岡氏が提唱し、髙實氏によって設立された当館は、アジアの和解と平和創造に貢献している。

2．設立の趣旨

当館は設立にあたり、以下の「設立の趣旨」を掲げている。

> 戦争や原爆の悲惨さはいつまでも深く胸に刻み、これを風化させてはなりません。しかし、悲惨な結果を招いた原因が、残虐の限りをつくした日本のアジア侵略にあったこともしっかりと心に刻む必要があります。受けた苦しみの深さを知ることが、与えた苦しみの深さも知ることにつながらなければ、平和を築くことはできません。
>
> 日本の侵略と戦争の犠牲となった外国の人々は、戦後50年たっても何ら償われることなく

見捨てられてきました。加害の歴史は隠されてきたからです。加害者が被害者にお詫びも償いもしないという無責任な態度ほど国際的な信頼を裏切る行為はありません。

核兵器の使用が正当化されれば再び使用される恐れがあるのと同様に、無責任な態度が許されるのならば、再び戦争が引き起こされる恐れがあります。

この平和資料館は、日本の無責任な現状の告発に生涯を捧げた故岡正治氏の遺志を継ぎ、史実に基づいて日本の加害責任を訴えようと市民の手で設立されました。政治、社会、文化の担い手は、たとえ小さく見えようとも一人ひとりの市民です。当館を訪れる一人ひとりが、加害の真実を知るとともに被害者の痛みに思いを馳せ、一日も早い戦後補償の実現と非戦の誓いのために献身されることを願ってやみません。

3. 展示内容

1）韓国・朝鮮人、中国人被爆者

入口を入ると正面に「長崎市原爆被害状況図」があり、その図を囲むように韓国・朝鮮人、中国人被爆者の写真を展示している。

①朝鮮人被爆者・李奇相（リ・キサン）さん
1933年日本の植民地時代、甘言にだまされて来日、1942年長崎県香焼の川南造船所に徴用で連行され、地獄の奴隷労働を強制される。1945年8月9日、香焼から脱出した直後、長崎駅付近で原爆被爆し、重傷を負う。1979年長崎県朝鮮人被爆者協議会結成に参加、初代代表を務めた。1982年12月死去

②朝鮮人被爆者・朴玟奎（パク・ミンギュ）さん。
日本の植民地化にあった朝鮮半島から、1939年日本に行けば仕事があると親類を頼って来日し、1945年8月9日原爆被爆。李奇相さん死去後、長崎県朝鮮人被爆者協議会の会長を務め、長崎市を訪れる修学旅行生などに原爆被爆の実態と朝鮮人差別の歴史と現実の問題を訴えてきた。2006年11月死去

③韓国人被爆者・徐正雨（ソ・ジョンウ）さん。
1943年4月14歳の時に端島へ強制連行され、暴力支配の中過酷な労働を強いられる。端島を「監獄島」と語る。その後、配置換えになった三菱造船所で原爆被爆。戦後も朝鮮人差別に苦しむ。修学旅行生に原爆被爆の体験と朝鮮人差別を語り、差別のない平和な社会をと訴えてきた。2001年8月死去

朴さん、徐さん2人の証言者がいなくなり、修学旅行生に語る韓国・朝鮮人被爆者はいない。当館は、2人のほか、「守る会」が実態調査した証言や資料を展示し、朝鮮人強制連行、韓国・朝鮮人被爆者問題を告発している。

④三菱造船所に強制連行され被爆した金順吉（キム・スンギル）さん
日本国と三菱に損害賠償を請求して1992年に提訴。1997年12月長崎地裁は違法行為は認定したものの、「国家無答責論」によって国を免責し、「別会社論」によって三菱も免責した。1998年死去。裁判は遺族が継承したが、高裁も最高裁も一審判決を追認した。

その他、夫・尹福東（ユン・プクトン）さんが被爆死した浦上刑務支所（現在の平和公園）で泣き崩れる韓国の徐栄子（ソ・ヨンジャ）さん（1992年）、夫・呉福有（ウー・フーヨー）さんが原爆死した浦上刑務支所で号泣する中国の牛秀連（ニュウ・シュウレン）さんなど、浦上刑務支所では少なくとも13人の朝鮮人と32人の中国人が原爆死した。

2）朝鮮人強制連行、中国人強制連行

右手、奥にはいると「強制連行」のコーナーがあり、当時強制連行された朝鮮人が収容された飯場を再現している。日本が日中戦争、太平洋戦争の激化に伴い、深刻になってきた労働力不足を補うため行った朝鮮人、中国人の強制連行、炭坑や鉱山、土木現場などで極めて劣悪な衣食住のもと、差別と虐待のなかで強いられた過酷な生活と労働の実態に光をあてている。

朝鮮人強制連行に関しては、韓国併合条約以降の

在日朝鮮人人口の推移、木鉢寮などの写真、当時の食事の模型、日本敗戦当時の長崎市及び周辺地区の朝鮮人飯場・寮・長屋等の場所と人員数一覧、長崎県内実地調査による朝鮮人人口推計、日本国内における朝鮮人の強制連行先、強制連行の実態証言などを展示している。日本政府は、1939年の閣議決定「労務動員実施計画」の中に組み込む形で「朝鮮人労務者内地移住に関する件」に基づき朝鮮人強制連行を行った。「募集（1939年7月から）」「官斡旋（1942年2月から）」「徴用（1944年9月から）」の3段階があったが、いずれも朝鮮人は強制的に連行された。「守る会」の推計では、3万人を超える朝鮮人が被爆し、原爆死した朝鮮人は1万人をくだらない。

中国人強制連行に関しては、日本政府が中国人強制連行を公式に認めた新聞記事、「華人労務者内地移入に関する件」（閣議決定）、中国人が強制連行・強制労働させられた事業場と強制連行数・死亡者数などを展示している。日本の企業は政府に対して中国人「労務者」の導入を要請し、これに応じて政府は、1943年4月から1945年5月にかけて、35企業の全国135事業所に38,935人を連行し、6,830人が死亡した。

再現した飯場を出るとすぐ右手に模擬炭坑、坑道の模型がある。

3） 朝鮮侵略、中国侵略

そこから、2階へ上がる階段には、「写真で見る日本の侵略」と題して、朝鮮侵略、中国侵略について展示している。朝鮮侵略に関しては、朝鮮への野望、「韓国併合」、民族性抹殺の皇民化、強制連行と徴兵など。中国侵略に関しては、大陸侵略の足がかり、カイライ国家満州、日中全面戦争へ、南京・重慶、万人坑、731部隊、三光作戦などを取り上げている。

4） 日本はアジアで何をしたのか

階段を上り2階の踊り場正面には「大東亜戦争図」を掲げ、「日本はアジアで何をしたのか」の展示をしている。中国や朝鮮のほか、南の島の「皇民化」（南洋群島）、トラックに積み込まれる遺体（フィリピン）、日本軍がもたらした餓死（ベトナム）、「大検証」による住民虐殺（シンガポール）、「死の鉄道」泰緬鉄道（タイ、ミャンマー）などの写真、「大東亜共栄圏」の解説を展示している。

5） 帝国主義とは

2階踊り場左側に、「帝国主義とは？」のコーナーがある。ヨーロッパ各国によるアジア・アフリカの分割を中心に「帝国主義の時代」関連年表を展示している。日本はアジアを解放したのではなく、「遅れてやってきた帝国主義国」として、植民地獲得競争に加わり、近隣アジア諸国を軍靴で踏みにじった。

6） 皇民化

2階踊り場右側には、「皇民化」のコーナーがある。「天皇」の「民」と「化する」ため、象徴的に行われたのが、神社参拝の強要だったが、ここでは、日の丸・君が代・日本語という3つのキーワードで、日本が植民地にし、あるいは軍事的な占領状態においた、台湾・朝鮮をはじめとするアジア全域での「皇民化」の実態を展示している。

7） 皇民教育

2階は4つのスペースに仕切られている。最初のスペースに入ると右側手前に「すべては天皇と国家のため」と題したコーナーがある。天皇の臣民として、天皇と国家のために尽くし、命を捧げる、そのような国民を育てるための「皇民教育」について展示している。また、福沢諭吉のアジア蔑視観についても展示している。

8） 長崎における朝鮮人強制連行

最初のスペース正面から左側は「長崎における朝鮮人強制連行」のコーナーである。長崎県内への朝鮮人強制連行について「守る会」の調査結果を基に展示している。調査結果を収めた『原爆と朝鮮人』第1集から第7集、強制連行関連年表、長崎県内各地の概要、朝鮮人労働者の遺骨の行方、端島・高島・崎戸全景写真、端島炭坑・崎戸炭坑における犠

牲者の名簿、強制連行関係資料、韓国の日帝強制動員被害者支援財団との学術交流協約書などを展示している。また、徐正雨さんの一生を証言に基づき展示している。

9）長崎における中国人強制連行

最初のスペース右側は「長崎における中国人強制連行」のコーナーである。長崎の中国人強制連行の真相を調査する会の調査結果を基に展示している。長崎において中国人が強制連行された事業場は、日鉄鉱業鹿町鉱業所、三菱鉱業高島鉱業所端島坑、三菱鉱業高島鉱業所新坑、三菱鉱業所崎戸鉱業所の4事業所で、すべて炭坑だった。「外務省報告書」によれば、各事業場への連行者数（うち死亡者数）は、鹿町鉱業所197（21）人、端島坑204（15）人、高島新坑205（15）人、崎戸鉱業所436（64）人、計1,042（115）人となっている。また、鹿町及び崎戸に連行された人たちのうち32（鹿町6、崎戸26）人は、浦上刑務支所で原爆死している。そして、崎戸の1人は警察署で取調中に死亡したことも判明している。三菱3炭坑の遺族を含む10人が国と県、三菱を相手に損害賠償請求訴訟に踏み切ったが、事実認定はされたものの、損害賠償請求は退けられた。その後、三菱マテリアルと和解協議が進められ、2016年6月に和解が成立し今和解事業を進めるための協議が行われている。当館もこれまで支援している。高島被連行者・連双印さん、端島被連行者・李慶雲さん、崎戸被連行者・王松林さん、鹿町被連行者・趙五十（チョウ・ウーシー）さん、原爆犠牲者遺族・喬愛民さんの証言、中国人強制連行関係資料などを展示している。

10）日本軍「慰安婦」問題

奥に進むと2つめのスペースがある。「日本軍「慰安婦」問題」コーナーである。日本軍「慰安婦」とは何か、元日本軍「慰安婦」たちの叫びが聞こえますか（初めて名乗り出た金学順（キム・ハクスン）さん（韓国）、長崎を訪れた姜徳景（カン・ドクキョン）さん（韓国）と黄錦周（ファン・クムジュ）さん（韓国）やその他の被害者の証言や写真）、日本軍慰安所マップ（「女たちの戦争と平和資料館」（wam）作成）、日本軍「慰安婦」問題をめぐる動き、関連資料、上海中国「慰安婦」資料館との友好館提携書などを展示している。また、2015年12月28日の日韓合意の新聞記事と、「被害者不在の「妥結」は「解決」ではない」との日本軍「慰安婦」問題解決全国行動の声明も賛同する意味も込めて展示している。

さらに進むと3つめのスペースがある。

11）南京大虐殺

正面から左側にかけて「南京大虐殺展示」コーナーがある。中国に対する侵略戦争のなかでも最も大量かつ残虐を極めた南京大虐殺について、証拠写真と解説パネルを展示し、歴史の真実から目をそらさないよう訴えている。「南京大虐殺記念館」提供の写真（家族全員が被害を受けた夏淑琴さん、全身に30余カ所の刺し傷を負った李秀英さんなど13点）、遺骨発掘現場写真、解説パネル（中国語・英語・日本語）、南京大虐殺地点表示図、「南京大虐殺記念館」との友好館提携書、「心からの謝罪と歴史認識の共有を」（訴え）、関連資料、日中友好・希望の翼報告集、南京大虐殺生存者長崎証言集会証言などを展示している。

12）731細菌部隊

左側手前、731部隊の背筋も凍る陰湿な犯罪を「永遠に消せない犯罪として」告発している。731部隊とは、部隊の活動、敗戦と米軍との取引、731部隊員のその後、「特移扱い」及び「特移扱い」に関する資料、731部隊の犠牲になった人々、生体解剖と死体焼却炉、野外特設実験場、「七三一部隊罪証陳列館」との友好館提携書、関連資料などを展示している。

13）なぜ日本は無責任であり続けるのか

日本はアジア各地で残虐行為を働いた。右側に、中国東北部などで行った残虐行為の証拠写真を展示している。その中には、カイライ国家「満州国」の

軍隊が日本の侵略に抵抗する人々を虐殺している写真もある。周囲の見物人は日本人である。

最後に４つめのスペースがあり、５つのコーナーがある。

14）戦後補償を拒む日本

戦後補償を拒む日本に長崎の地で闘いを挑んだ２人の裁判を紹介している。民族の誇りをかけて闘った金順吉裁判、在外被爆者の差別撤廃に大きな一歩を勝ち取った李康寧（イ・カンニョン）裁判である。その他、韓国・朝鮮人 BC 級戦犯、戦後補償ドイツとの比較などを展示している。

15）弾圧に抵抗し、戦争に反対した人たち

戦前の思想弾圧と抵抗運動関連年表、治安維持法、横浜事件に見る戦後無責任などを展示している。そして、反戦主義者として軍務を拒否した医師・末永敏事など戦前、治安維持法による弾圧に抵抗し、戦争に反対した人たち９人を展示している。

16）「長崎平和資料館」の設立を提唱した「岡正治記念コーナー」

岡正治氏（1918 ～ 1994）は、早くから日本の加害責任に着目し、韓国・朝鮮人被爆者の実態調査と救援に取り組んだ牧師であり、平和運動家だった。当館は氏の遺志を継いで平和と人権の確立に貢献することを願って設立された。氏の生涯から学んでほしい。略年譜、生前の写真、忠魂碑違憲訴訟の報道記事と訴状、著書、絶筆原稿、愛用された遺品などを展示している。

17）資料館の設立・発展のため尽力した髙實康稔さん

髙實康稔氏（1939 ～ 2017）は、岡正治氏とともに活動し、岡氏が亡くなった後、その遺志を受け継ぎ当館を設立し、発展のために力を尽くした。氏の生涯から学んでほしい。略年譜、生前の写真、鞄・時計・帽子・ノートや電子辞書など生前の愛用品などを展示している。

18）そして、いま私たちは…

展示を見た後で、ではどう考え、どう行動すればよいかを問いかけるコーナーである。過去は変えられなくても、現在と未来は一人ひとりの力によって新しく築くことができるとの髙實氏の思いが込もる。世界の戦争や紛争に関する報道記事(随時更新)、戦後補償や憲法、教育基本法、靖国に関する報道および論考記事（随時更新)、「どんな戦争にも反対します」（訴え）など展示している。

4. 活動紹介

1） 友好館提携

当館は、2000 年８月に中国・南京の「南京大虐殺紀念館」と、2005 年９月に中国・哈爾浜の「七三一部隊罪証陳列館」と、2010 年 10 月には「上海中国「慰安婦」資料館」と友好館提携関係を

結んでいる。また、2018年2月には韓国・釜山にある日帝強制動員歴史館を運営している日帝強制動員被害者支援財団と学術交流協約を締結し、新たな事業を進めようとしている。

2）「長崎と南京を結ぶ集い」南京大虐殺生存者長崎証言集会

「南京大虐殺記念館」と友好館提携を結んだことから、12月に南京大虐殺生存者証言集会を行うようになった。証言とともに研究者の解説もあり、第1回（2000年）から市民の強い関心を集めた。お招きした証言者は、開催しなかった2007年を除き、15人で、痛ましい迫真の証言の最後に必ず「中日友好と世界平和」の必要性を訴えられ、歴史認識の共有と日中友好を願う市民との熱い信頼関係も生まれた。生存者が高齢化するなか、第15回（2015年）で終了することになったが、その証言は当館「南京大虐殺コーナー」に展示し、真実を告発している。

3）日中友好・希望の翼

2000年4月に「南京大虐殺紀念館」の朱成山館長が当館を訪れ「国際的なレベルの展示」と高く評価していただき、「銘心会南京」（日中両国の市民同士の理解と真の友好をめざして、南京大虐殺の事実を明らかにする研究と活動を進めている大阪の市民団体。松岡環代表）とともに南京を訪れないかとお誘いいただいた。それを機に当館では、2000年から、2003年を除き、2015年まで毎年8月15日前後に「友好訪中団」を南京へ派遣してきた。その後、2016年以降は12月13日の国家公祭日前後に派遣している。そして、2002年からは「日中友好・希望の翼」として県内在住または県内学校在学の学生2人を募集し（自己負担5万円）、訪中団に加え派遣している。「日中友好・希望の翼」は髙實氏によって命名され、若い世代が、南京大虐殺をはじめ中国侵略戦争の実態を現地で学ぶことによって、日中友好の架け橋となる「希望」が込められている。これまでに、延べ21人を派遣しているが、今年も第16回「日中友好・希望の翼」、第18次「友好訪中団」として大学生2人を派遣する。この訪中は、「銘心会南京」の活動趣旨に賛同し、「銘心会南京」の訪中団に同行させていただいているが、同会も学生を募集・派遣している。派遣学生の中には、その後当館の活動に協力してくれる者もおり、彼ら彼女らの今後の活動に期待している。

4）良心的兵役拒否のドイツ青年の受け入れ

2006年9月から、ドイツが兵役を中止するまで、良心的兵役拒否者一人を受け入れていた。当館で代替勤務をしたいと強く望んだ一青年の希望を叶えるために、代替勤務施設としての認証を得て、受け入れを実現した。受付補佐や清掃、展示物の補修が主な仕事だったが、2011年8月まで、5人を受け入れた。反響は大きく、市民から温かく迎えられるとともに、ドイツと日本の違いについての講演や執筆を求められることもあった。ドイツはナチスの戦争犯罪を学び、教育の場や社会、政治の場で、過去の克服をある程度成し遂げてきた。それを語ることで、日本の若者や市民に対して啓蒙の役割を果たしてきた。そのことは当館の目的に通じるところがあったし、彼らが長崎に滞在した意義は大きかった。講演の記録は、当館に残されている。今後もドイツとの交流も続けていきたい。

5）学ぶ旅

2016年より、8月から9月にかけて「学ぶ旅」として訪問団を派遣する事業を新たに始めた。そのきっかけが、良心的兵役拒否者として受け入れていた青年が母親とともに長崎を再び訪れたことだった。2016年「ドイツに学ぶ旅」に始まり、2017年「韓国に学ぶ旅」、2018年「中国に学ぶ旅」と実施してきた。そして、「学ぶ旅」でも「日中友好・希望の翼」と同様に学生を募集し、同行派遣を行っている。そして報告会や「西坂だより」で旅の感想を報告してもらっている。同行した学生たち（これまでに5人）の今後の活動に期待している。

6）各種講演会・上映会

歴史認識を深め、設立の趣旨を達成するために適

宜、講演会や映画の上映会を行っている。また、ビデオ上映会も当館会議室で随時行ってきた。

7） もう一度学ぼう！日本の近現代史連続講座

2010年9月から、市民を対象にした「もう一度学ぼう！日本の近現代史連続講座」を開講した。明治以降の日本の歴史、特に対外関係に注目しながら、毎回一人がレポーターになり、問題提起の形で発表を行い、その後参加者全員で意見交換するという形式で、歴史認識を深めることを目的として行った。第5期まで（2015年3月）行い、1945年日本の敗戦までを終了した。今、新たに1945年日本敗戦以降の現代史に挑戦すべく検討を始めている。

8） 機関誌「西坂だより」の発行

年に4回（10月1日、1月1日、4月1日、7月1日）、当館の機関誌「西坂だより」を発行している。髙實氏は、「西坂」は当館の所在地「西坂町」から取った名称だが、この地は豊臣秀吉のキリシタン弾圧（26聖人の虐殺）で知られ、単なる地名としてではなく、弾圧や侵略を告発する意味を込めている、と言われていた。当館の活動記録と提言、行事案内とともに、必ず「来館者の声」を掲載している。最新の第91号（2018年10月1日付）からいくつかの「声」を紹介する。

> 日本がアジア各地で行った残虐な行為には驚かされた。なにせ、学校の教育で、そのような事に関しては一切習ってこなかったので、ここまで残酷な事を、我々祖先が為していたという事実は衝撃的で、日本はこの残虐な事実を隠すのではなく、我々日本人に公開し、平和への意識を高めていくべきではないのかと感じた。…今までは、中国が大袈裟に主張しているだけだと思っていたが、そうではなく、ありのままを語っていただけなのだと感じた。
>
> （男性・18才・学生）

> 長崎に住み20年も経ちましたが、この岡まさはる記念長崎平和資料館について全く知りませんでした。今までの学生生活では学ぶことのできなかった日本の過去を知ることが出来ました。…今日ここを訪れて私の知らなかった事実、悲惨な日本の過ちは、改めて間違いだと強く思いました。同じ日本人とは思えないような残虐な行為の数々に驚き、簡単に許されることではないと思いました。この過去を十分に理解を互いにすることはできないかもしれませんが、いつか、いつの日か、互いを許し、平和な世界になれることを祈ります。今日ここに来て良かったです。
>
> （女性・20才・学生）

> 被害者としての側面が多く取り上げられている資料館とは違って、自分たちにも悪いことをしてきた過去が多くあることを改めて知って、被爆国としての責任だけ（核廃絶への動きをつくる）でなく、被害国への反省の意味も込めて責任が生じているなと感じました。今まで知らなかったことばかりで、またメディアでは知り得ることのできない内容が多かったので今後も継続して活動してほしいなと思います。
>
> （男性・20才・大学生）

これらの「声」は毎号見られるといって過言ではなく、これらの「声」ほど当館にとって貴重なものはない。「本当のことを知りたい」、そして「アジアとの友好を築きたい」という希望が伝わってくる。この希望を原動力として、今後とも様々な困難を乗り越えて維持・運営していこうと改めて決意している。この「声」がアジアとの和解、そして平和創造、日本政府に再び戦争をさせないための力になるものと確信している。

5. 来館者

当館の昨年度1年間（2017年10月～2018年9月）の入館者は4,190人だった。そのうち、約4割が修学旅行など学生である。原爆資料館の2017年度の入館者数が705,314人であるから、その

0.6% にも満たない。長崎市が観光地図にも載せることのない当館だが、来館した学生の「声」は前述のとおりであり、来館する市民が設立の趣旨を実現してくれるものと希望を持っている。特に若者は希望である。日本の市民、特に若者の来館者を増やすことが当館の課題である。

6. 維持・運営

当館の維持・運営は、財政的には約 110 人の正会員（個人年会費 1 万円、団体年会費 3 万円）、約 70 人の賛助会員（個人年会費 3,000 円、団体年会費 1 万円）の会費と会員や市民からの寄付金、そして入館料（大人 250 円、高校生まで 150 円）や書籍販売などの収入によって支えられている。また、日常的な運営については、完全無給（交通費さえ支払っていない）の理事 15 人、監事 2 人、（理事 10 人を含む）37 人の受付ボランティアによって支えられている。当館は行政には全く依存することなく、設立の趣旨に賛同する会員や無償ボランティアなど一人ひとりの市民の献身によって維持・運営されている。

7. おわりに

日本では、ドイツと違って、学校教育の中で日本の過去の侵略戦争や植民地支配における加害行為について十分には教えない。そのような中で、当館は、過去の加害の歴史を市民や若者たちに知ってもらうという極めて重要な役割を担っている。そのことが、日本の過去の植民地支配や侵略戦争の被害を受けたアジア民衆との和解、そして日本政府に再び同じ過ちを繰り返させないために重要なことであり、平和の創造につながるものと確信している。そのような当館の役割と使命を自覚し、今後も岡氏や髙實氏の遺志を継ぎ、市民の力で、当館の運営や活動を継続していくとともに、若い世代へ継承していきたい。

2018 年 11 月、岡氏・髙實氏に捧ぐ。